



ヘーベルハウス

2.5世帯ものがたり

～第3話～

姉の沈黙と 大胆な提案。

姉に思いは伝わるだろうか？

台所では母が晩御飯の準備をし、姉と妻が皿を並べている。「おばあちゃんのはん、たのしみー!」「わーい!」長男の翔太と長女の春香。子どもたちは素直に育ってくれている。「おばあちゃんのおりょうりは、チーンってしないね」「ねー」子どもたちは素直に育ってくれている。実家での晩餐は、四歳の娘の二股自慢、六十五歳の母のすべらない話、三十八歳の姉の十二回目のモテ期(本人談)の報告、六歳の息子の謎のナゾナゾなどで、おおいに盛り上がった。食事も終盤にさしかかったころ、お酒の力を勇気に変えて、僕は本題を切り出した。「姉さん、大事な話があるんだ。この家もガタが来てるじゃない?地震も怖いし。それに親父たちもじきに七十じゃん。ここでこの家建て替えて、みんなで住まないか?親父たちと姉さんと僕の家族での同居。『2.5世帯』って言うらしいよ。』ヘーベルハウスの2.5世帯住宅』は、互いの居住空間がしっかり分離されてるし。姉さんの部屋なんて超居心地よくなるんだぜ。その上、共有スペースもみんなに快適だから、ひとりの時間も、家族でシェアする時間も、好きなように楽しめるんだ。親のサポートも協力し合えるし。姉さん、2.5世帯で暮らさないか?」思いの丈をひと息に打ち明けた。……。黙りこむ姉。続く沈黙。重い空気を破ったのは子どもたちだった。「ぼく、いっしょにすみたい!」「ゆきこおばちゃん!」「由紀子おネエさんからも、提案があります」「おばあちゃんのおばあちゃんのおばあちゃんのおばあちゃん!」この家に金輪際『おバさん』は存在しません!。「……ゆきこおば、おネエさん」娘が小声で言い直す。「……そう来たか」肯定とも否定ともいえない姉の提案。想定外の事態に、トイレ休憩を提案する僕だった。

(明日予定の広告紙面にて)ついで

2.5世帯住宅で、暮らしませんか?

考えよう。答はある。

ヘーベルハウス